

9月15日(金) シンポジウム第2室(732)

コミュニケーション重視の英語教育における英文法 English Grammar and Communication-Oriented Teaching of English

司会 早坂 高則
(宮城教育大学)

【趣旨】

国際化の進展につれて、従来の訳読中心主義の英語教育が批判の対象となり、代わってコミュニケーション能力の育成を主目的とする英語教育の重要性が叫ばれている。このこと自体は、社会の動向・要請を考えれば一般的な英語教育の方向付けとしてまことにもっともなことと思われる。さて、そのような英語教育において、いわゆる学習英文法はどのように位置づけられるべきか。英文法は、ともすれば訳読中心主義の申し子のように思われ、批判(ときには非難)の対象にされがちだが、はたしてコミュニケーション能力の育成にとって学習英文法(学校文法)は有害無益だろうか。本シンポジウムではこの点に議論を集中し、コミュニケーション能力の育成に真に役立つ英文法の指導法はあり得ないかを考えていきたい。

“Tool”としての「学校文法」

提案者 早坂 高則
(宮城教育大学)

Oral communication の重要性はもちろんだが、世界中がネットワークで接続されつつあり、文字情報も瞬時にして世界中に届く今日を考えれば、written communication も同様にその重要性を増していく。この点から、この両者を同様に重要なものにとらえていく。

大学卒時の英語力の目標としては、単なる日常会話にとどまらず、実用的な情報交換も可能な(たとえば「仕事」に使える)レベルを、または少なくともそのための素地を作るところまでを目指したい。

英語学習者にとって、学習時間の絶対的な不足、日常生活の中で英語を使用する場面がほとんどない、という現状を考えた場合、とくに基礎段階では純粋な communicative approach のみで成果を上げることは困難と思われる。

いろいろな意味で困難な状況にいる学習者に対し、英語の skill の獲得を支援するための“ガイドライン”として、または「道具」として「学校文法」をとらえていきたい。文法の学習の過程で、いわゆる grammar fatigue を生じさせたのでは意味がない。

文法項目を並べて説明しただけでは実際の skill の獲得に結びつかず、ほとんど役に立たないといっていいただろう。かつてのこれに近い教授法が批判的になっているものと思われる。

まず、学習者の状況を十分考えた上で、文法項目を有機的に整理統合する。これらを知